

イネ縞葉枯病情報第2号

西三河地域のコシヒカリのヒコバエでイネ縞葉枯病が多発！
次作の伝染源となるため、速やかに耕起を行いましょ。

平成28年11月1日
愛知県農業総合試験場
環境基盤研究部病害虫防除室

1 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。発病株を吸汁したヒメトビウンカはウイルスを獲得し、他のイネにも感染させます。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します（ゆうれい症状）。また、穂が出すくんだり、不稔になることにより減収します。

感染した株では、稲刈り後のヒコバエで明瞭な病徴が表れ（図1）、これらが伝染源となり、ヒメトビウンカの保毒虫率が高まります。

ヒメトビウンカはウイルスを保毒したまま越冬するので、次作のイネでの発病が多くなる傾向があります。

本県で栽培されている「あさひの夢」、「ゆめまつり」、「あいちのかおりSBL」、「大地の風」などは、本病に抵抗性ですが、「コシヒカリ」は感受性で、近年発生が増加しています。

2 ヒコバエにおける発生状況と今後の予測

本年10月下旬に、県内のコシヒカリ24地点（ヒコバエ）で本病の発生状況を調査した結果、海部地域及び東三河地域の4地点では、発病株率は1%未満でした。一方、西三河地域では、全ての地点で発生が認められ、発病株率が50%を超える地点もありました（図2）。このため、西三河地域では、ヒメトビウンカの保毒虫率が高まり、次作での発生が多くなると予想します。



図1 イネ縞葉枯病の症状

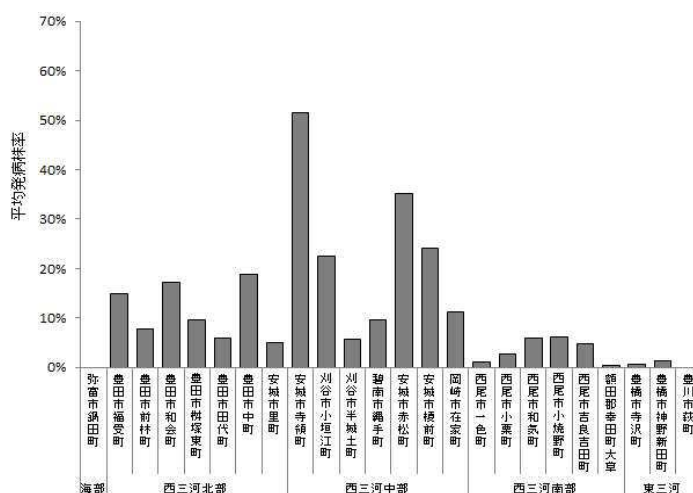


図2 イネ縞葉枯病のヒコバエにおける発生状況

3 防除対策

- (1) ヒコバエはヒメトビウンカの生息場所になるほか、発病株は病原ウイルスの伝染源となります。速やかに水田を耕起し、ヒコバエを放置しないようにしましょ。
- (2) ヒメトビウンカは畦畔等のイネ科雑草で越冬するため、水田周辺や畦畔等の除草を徹底しましょ。
- (3) 次作では、ヒメトビウンカを防除するため、育苗箱施薬等を行いましょ。